熊本学園大学 外国語学部 第30号
英米学科 GAZETTE

令和５年７月
発行・編集
熊本学園大学　外国語学部

巻頭言

熊本のキャンパスライフ

英米学科長　坂田　直樹（准教授／英語教育学）

高校卒業後の進路を選ぶとき、選択肢が多くて、頭を悩ませる場面が多いかもしれません。その際、分野や難易度と共に気になるのが、「どこ」で学ぶか、という点でしょう。私は、熊本で学ぶことの良さが、全国的にあまり知られていないことを、とても残念に思っています。

東京で大学生活を送った私ですが、九州へ帰郷してから、「熊本ではなぜあんなに若者が元気なのか？」という声をよく聞くようになりました。熊本では若者が主役として活躍する場面が多々見られます。例えば、毎年 10 月に開かれる、熊本暮らし人まつり「みずあかり」、運営委員として、本学の学生が深く関わっているようです。

熊本の持つこのような魅力に、熊本で過ごした高校生の私は、気づくことができませんでした。東京やその後自分が生活をした福岡にはない魅力がある熊本で、大学生活を送ってみたかったというのが、私の偽らざる本音です。熊本市の中心部に位置するキャンパスに通いながら、そこに集う人々と、語り合い、交流をしている本学の学生は、本当に貴重な経験をしていると思います。

「地元だから」ではなく、熊本で学生生活を送る良さに、もっとフォーカスを当ててみませんか。

研究紹介

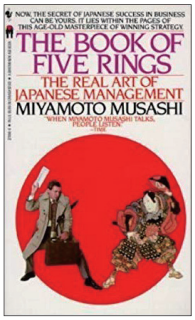
私の研究：「コーパス文体論」と「異文化翻訳論」

堀　正広（教授／英語学・文体論・コーパス言語学）

現在２冊の研究書を執筆中です。１冊目は、『コーパス文体論』（ひつじ書房）で、コーパスを使った文体研究です。機械可読形式のテクストをコンピュータに読み込み、ツールを使って分析します。理論的な裏付けに基づいた、より客観的で記述的なデータに基づき、作家・登場人物・階級・文化・習慣、そして文脈などとの関わりを考慮しながら分析を行います。英米文学作品を中心としていますが、新聞・スピーチ・インタビュー、さらには日本文学のテクストも分析する予定です。

もう１冊は、異文化翻訳論です。「日本文化は英訳できるか」というのがテーマです。俳句は英訳できるか、禅公案は英訳できるか、などについて例を示しながら、日本語と英語の本質的な違いを浮き彫りにし、英訳にともなう諸問題を考察しています。たとえば、宮本武蔵著『五輪書』の英訳は 11 種類以上ありますが、その英訳は実に多様です。１つだけ例を取って説明します。

「水の巻」の項目に「無念無相の打といふ事」があります。「無念無相」とは仏教語です。では、英語ではどう訳されているでしょうか。６つの英訳を紹介します。



（1）「no＋名詞」のタイプ
　Victor Harris (1974):
　　No design, no conception
　Kaufman (1994):
　　No Thought, No Idea
　Ashikaga (2003):
　　No Plan – No Concept

（2）「without＋名詞」
　Cleary (1993):
　　Striking without Thought and without Form

（3）否定語を使わない
　Nihon Service Corporation (1982):
　　On the Blow Free from Worldly Thoughts
　　– The Spontaneous Blow
　Tarver (2002): The Impulsive Strike

これらの英訳で無念無相は伝わるでしょうか？著書では、それぞれの翻訳の違いを日本語の構造や文化の違いの点から分析しています。

図書紹介

山本七平著『渋沢栄一　近代の創造』
祥伝社　2009 年　1,400 円＋税

赤井　恵子（教授／日本近代文学）

1987 年、PHP 研究所から『近代の創造　渋沢栄一の思想と行動』として発刊された書の改題・再刊。山本七平は本書を「渋沢栄一伝」として著してはいない。取り扱われたのは、1863 年から 1873 年。91 歳で没した長い人生のうちの 11 年間、「高崎城乗っとりという無謀なクーデターの計画から第一国立銀行総監役（中略）に就任するまでの期間である」。

渋沢は幕末から明治への急速な移行の担い手の一人だが、その営為の元となる自己形成期は「西欧思想とは無関係の時代であ」る。山本は、「埼玉の田舎の百姓の子の渋沢栄一がパリで開眼した」式の捉え方を「珍説」として斥ける。幕末から明治への過程で活躍した人々は、「やはり、『東アジア文化圏』のさまざまな思想や歴史的体験、およびそれに基づく発想から学んだ人」である。山本が常に強調するのは、それらの人々が西欧思想を決して白紙の状態で受け入れたのではない、ということである。

したがって、26 章から成る本書の殆どは、渋沢の思想と行動を根本のところで規定した伝統的思考に関する詳述である。特に、渋沢とその従兄尾高藍香が藍売りの旅の途上、漢詩集を著作したことが語られる第七章が興味深い（この時、渋沢 17 歳）。「自分の詩的世界をつくり自らその中に居る能力」が、渋沢のゆるぎなさを支えた、とされる。また幕末における中国的教養の浸透度の深さが、驚嘆をもって語られている。

学科最新ニュース

短期集中英語研修が再開！

ジョセフ　トウメイ（教授／認知言語学）

英米学科の「短期集中英語研修」が再開されました。これは、春期休業期間中にミシガン州立大学連合日本センター（滋賀県彦根市）で行われる英語環境で行う研修に参加することで、科目の授業単位として認定するもので（研修への参加費用、交通費等は自己負担）、今回は２年生５名、3年生１名の計６名が受講しました。

研修では、英語圏への留学準備のための実践的なレッスンや、アメリカの大学さながらの授業がありました。ミシガン州立大学連合の教員の指導のもと、アメリカからの留学生約 30 名の協力を得ながら、グループごとにセリフやナレーションを披露する英語劇、日本の文化を紹介するプレゼンテーションなどさまざまなプログラムに取り組むことで、英語の語彙力だけでなく、表現力や対応力を磨きました。

受講した学生からは「先生や留学生がとても優しく、互いの文化について教え合うことができ、会話のなかでも場面に合わせた英語の表現を指導してもらえるなど、とても貴重な時間になりました」「留学生との意思疎通がうまくいかなかったとき、先生から『知っている単語だけでも伝わるから大丈夫』とアドバイスをもらえて、まずはコミュニケーションを取ろうという気持ちが大事だと分かりました」との声が聞かれ、満足度の高い研修となったようです。

お詫びと訂正

令和５年５月発行の本誌第 29 号「『エアライン・ツーリズムプログラム』の新設について」の記事におきまして、第二段落に以下の誤りがありました。

（誤）ワシントン学院と提携し　→　（正）ワシントン学院の協力を得て

お詫びするとともに、ここに訂正をさせていただきます。

きみと未来をつなげる
クマガク

編集人　坂田　直樹
〒862-8680　熊本市中央区大江2-5-1
TEL: 096-364-5161（代表）　Mail: na-sakata@kumagaku.ac.jp